

研究のティップス (村主流)

目 次

- A この研究テーマでOK？
- B 文献リスト作成は研究の基礎
- C 論文の読み方
- D 研究書の読み方
- E カードの取り方
- F デジタル時代のデータベース作り
- G 発想法
- H なかなか執筆に取り掛かれない人に
- I 付録——修士論文目次ページ (モデル)

A この研究テーマでOK?

1) 同時代的な現象はきわめて扱いにくく、エキスパートでないと無理だ、という論文執筆本の著者もいる。これには大きな真理がある。研究対象となる一次資料や現象が過去のものだと、先行研究もある程度存在し（ある場合にはおびただしく存在し）、学生はそれを読まねばならず、その作業を通して得るものがたくさんある。即ち、異なる見解、研究方法、論文の良し悪し、など。過去の現象を扱う場合には、自ずと研究本来のトレーニングに導かれるということがある。

2) しかし、現代的な現象を扱う場合には、それに関する先行研究は極めて少なく、そして見つけられるものも研究とは言えないもの（著者の意見に過ぎないもの）、レベルの低いものであることが予想される。この場合には、上のようなトレーニングに導かれにくい。しかし、メディア研究の学生が現代のメディア状況に興味をもつことも自然なことである。その場合、どうすればよいのか。

3) そのヒントは得るため、現代的な現象を扱った本を一つ取り上げてみよう。西垣通『IT社会のゆくえ』（春秋社、2006）は、「情報」が世界観、人間観を一変させつつあるとの認識に立つ書である。著者は人間が内面からコンピューターの奴隷とされつつあるのではないかと批判する。そしてITの思想的源流を探り、現代社会の諸問題との関連を探る。すなわち、その本にはITに関する事柄だけではない、現代社会に対する理論、歴史的な知識が動員されているわけである。だから、あなたが現代的なメディア現象を扱う場合でも、先行研究がないのでその現象を叙述すればよいだけ、アンケートを取ればよいだけ、インタビューを聞き書きすればよいだけ、ということにはならない。こうしてみると、先行研究がない場合には、どれほど大変な知的作業になるかが、わかるだろう。また、現代的現象を扱う場合でも温故知新の精神は大切なのだ。メディア論の代表的な思想家の一人であるマーシャル・マクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』（竹内書店、1968）がシェイクスピアの『リア王』から始まっていることの意味をよく考えてみよう。

4) 山内先生と戸田山先生の本には自己破滅する研究テーマのリストが紹介されている（それぞれ、35頁、64頁）。これを見て、あなたの研究テーマが自己破滅志望でないかどうか、よく考えなさい。戸田山和久『論文の教室——レポートから卒論まで』（NHKブックス、2002）、山内史朗『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書103（平凡社、2001）。

B 文献リストの作成は、研究の基礎

1) このリストは一度作成したら完成ではなく、研究中は常に成長させなければならない。研究書や論文を読めば、それが利用した文献が示されているはず。リストはそれらを取り込んで

どんどん長くなる。

2) 自分の研究テーマについて、名古屋大学図書館がどのような研究書やジャーナルを所蔵しているか、調べる必要がある。

3) それでも十分ではない。あなたの研究テーマは修士論文や博士論文にふさわしい範囲に限定されているはず（されているべき）。その研究テーマに関係のある、新しい研究書が出版されたかもしれない、新しい学術雑誌が創刊されたかもしれない。新しい研究書は院生経費で購入希望をだす。あるいは自分で購入する。その際、購入や注文は現物が自分の手元に届くまでの日数を考えておくべき。

4) 名大にない学術雑誌は名大の図書館を通じ、他大学から借りる。検索サイトは Webcat : <http://webcat.nii.ac.jp/>

5) あなたの研究テーマがあなたの出身国や日本のメディア現象に関わるものであったとしても、あなたの母国語と日本語の文献（翻訳を含む）だけでは、十分ではない。英語文献も文献リストに含めなければならない。

6) あなたの研究テーマが日本のメディア現象に関わるものであったとしよう。あなたは、なぜ英語文献が必要なのか、どのような英語文献が必要なのかと、思うかもしれない。理論、方法論（アプローチ）、現代社会とメディアに関する研究、扱う対象は違っても同じ方向性をもつもの、そのメディアの歴史などを英語文献においても探すのである。英語圏では、メディア研究は日本と比較にならないほど、盛んであるからだ。それはメディア研究に係る学術雑誌の種類の高さを見てもわかる。言論統制の比較的厳しい国のメディア関係の研究は外国の方が進んでいるかもしれない。

7) 研究者は、他の人が書いた論文を手にとると、まず文献リストから見る人は少なくない。その論文著者がどのようなデータや理論を使って研究したのか、見当をつけるのである。もし、あなたの文献リストに挙げられている最新の研究が10年前のものであったとしよう。あなたはこの10年間の研究の進展を知らないのかと、疑われる。その10年間に、あなたが立てた問いは、すでに解答が提出されているかもしれないのだ。

8) 料理と似て、鮮度も大事だ。翻訳はすでに鮮度が落ちている。最も新鮮なのは学術論文である。研究者は初め学術雑誌に論文を掲載し、その後、いくつかの論文をまとめて一冊の本とする場合がある。だから、研究書もある程度、鮮度が落ちている。

9) 日本は翻訳文化の国と言われる。話題になった外国の本が数年をおかず翻訳される場合もある。研究書の翻訳に関しても似た状況にある。しかし、注意が必要。欧米ではある研究書が高い評価を受けると、それに対する批判もすぐに出る。しかし、日本ではそこまで翻訳されることはない。この地で定評ある本とあなたが思っているものは、彼の地で対抗的見解がすでに与えられているかもしれない。

10) 一次資料、二次資料、三次資料という用語を理解し、特に三次資料の使用に注意しなさい。

C 論文の読み方

1) まず、自分のテーマに関係があると思われる、集められる限りの論文のコピーを取れ。必ずコピーを取ること。オリジナルでは読まない。必要な論文は先行研究を読み進むに従い増えていき、コピーも増える。

2) とりあえず集まった論文（例えば50篇）をできるだけ短期間に通読する。その際、ノートを取るなどという浅ましいことは考えない。一つの論文を読みおわったら、三つの作業をする。

（ア）A、B、Cのランク付けをする。（イ）論文の内容に関し、一行のコメントを論文の表題のページに書く。（ウ）コピーの右上隅に刊行年を書く。

3) 論文コピーは上で記入した刊行年の古い順番からコピー用紙の箱に入れておく。すなわち新しい論文ほど上に置かれる。

4) 今度は、A評価の論文（ある場合には、B評価のものも）を熟読し、自分の評価が間違っていなかったかどうか確認する。このときもノートは取らない。しかし、読む途中で思い付いたアイデアはコピーの余白に書き留めておく。また、今回の読みでは、注にも注意を払う。著者が本文で展開させなかったアイデアが注に書かれている場合がある。それは貴重なアイデアである場合があり、あなたがそれを自分の論文で発展させることができるからだ。

5) あなたはこの段階に到って、ある研究者がどうしてA評価の論文を書くことができたのかその秘密を探りたいという気持ちになる（ならなければならない）。著者はどのようにしてそのアプローチや視点やヒントを得たのか。どれくらいの知的内蔵量があるのか（私が知っているシェイクスピア研究者はマルクスとフロイトのほとんど全部を読んでいた）。創造の秘密に肉薄するため、詳細なノートを作る。また、著者が利用している研究書や論文を自分も一度は手にとって眺め、そして読んでみる。

6) あなたは自分もいつの日か、A評価の論文を書くぞと心に誓う。また、C評価の論文を書いてはならないと自分に言い聞かせる。

7) 論文（A、B、C）の余白に書き込んだ自分自身の発想をカードに書き取る。

D 研究書の読み方

1) 速読、遅読、精読、通読、拾い読みなど、時と場合によって様々な読み方をしなさい。それはあなたの力量、持ち時間、相手（本の内容）による。理論書は一筋縄では理解が困難など

きがある。そのようなときにはその思想家の解説書を探し、そこから始めなさい。

2) 翻訳書の項でも述べたように、その本の鮮度、その本に書かれている事柄について既に提出されている批判を意識せよ。本の説得力によって、著者の議論に対し批判的になることができない場合があります。そのときにはその影響力を中和するため、異なる立場の著者による本を読む必要がある。そのためにも文献を多くあたる必要がある。また、新しい文献にも当たる必要がある。日本語文献と、あなたの母語による文献だけではすまない場合は多いだろう。

3) メディア研究に関する教科書を指導教員と相談して一冊決め、熟読しなさい。この場合の「教科書」とは基本的な知識の全体を網羅した本です。

4) 研究者としてのあなたのモデルになってくれるような本を見つけなさい。モデル本はあなたの研究テーマに直接関係がなくても構いません。その「星」にあなたを導かせなさい。私(村主)はシェイクスピア研究が本来の専門ですが、ある時期の「星」はチャールズ・シーガルというギリシア悲劇の研究者でした。

5) 序文を飛ばさず読みなさい。特に洋書では著者が学問的恩恵を受けた人々の名前が書かれていることが多い。

6) これは大切と思った本は注にも注意を払いなさい。これは論文の項で書いた通り。

7) 研究書や論文を集めて読み進んでいると、同じ文献が利用されているのに気が付きます。研究者は、それらに依存し、また批判することによって、自分の研究を展開しているのです。繰り返し現れる文献は要注意。あなたも必ず読まねばならない。

8) 自分のテーマに関係のある資料は、他の研究書が言及していなくても無視してはなりません。ところで、「自分のテーマに関係のある」ということをあなたはどのように知りますか。関係があると判断するのは、あなたの研究者としての勘によるのです。ですから、人が聞けばとんでもないものがあなたの中で結び付けられるかもしれない。それが成功すれば、目の覚めるような論文が出来上がります。かつて村主の身体論クラスで、バクシーシー山下監督のAV作品と、当時社会的に問題となっていたオウム真理教を結び付けて論じた学生の論文に接し、驚いたことがあります。

9) 重要な本は自分で買う。院生の懐具合がわかる先生としては言いにくいのですが、研究者にとって本は、料理人の包丁、大工ののこぎりのように、身近になければならないのです。

E カードのとり方

カードの活用に関心のある人は、梅棹忠夫『知的生産の技術』(岩波新書 青-722、1967)を読んでみなさい。

F デジタル時代のデータベース作り

私はあるとき、それまでノートとカードを使っていた方法をデジタル化しようと思い立ち、データベースソフトや文献ソフトを使ってデータベースを作り始めたが、途中で挫折してしまった。今では元の原始的な方法に戻っている。デジタル化しようとする人は包括的なデータ集めを目指す、これは要注意だと感じる。データ集めにも自分の足跡をつけていく方がよいのではないか。Aの資料を読むのは、Bの資料に教えられたからである、というふうに自分の中に脈絡があった方がよい。そうはいつてもデジタル化でうまくやる人がいるかもしれない。あるいはどのような方法があるのか、関心をもつ人がいるかもしれない。その人たちのために、次の二冊を紹介しておく（OSは古い時代のものだが）。研究に使用できるフリーソフトも紹介されている。中尾浩/伊藤直哉 『Windows 95版人文系論文作法』（夏目書房 1998）と中尾浩 『マッキントッシュによる人文系論文作法』（夏目書房 1995）。

G 発想法

1) 外山滋比古『知的創造のヒント』（講談社現代新書 490、昭和 52）によると、中国の宋時代の詩人、欧陽修は馬上・枕上・厠上の三上を妙案の浮かぶすぐれた場所として考えたということである（27）。外山は精神を自由にするには、肉体の一部を拘束して、いくらか不自由にする方がいいらしいと述べている。さらに、「机に向ったり、勉強しているときでないことに注目すべき」であるという（52）。

2) だから、アイデアは不意の訪問者である。訪ねてきたら、その場ですぐに書き留めておくことが必要だ。あちこちに書いては、紙はすぐに散逸する。アイデアを記録する手帳を決めておくとよい。

3) また外山は、考えの種子はそっと寝かせておくとよいとも助言している。「しばらく忘れるともなく忘れていて、おそらく無意識のうちに熟していたであろう考えが突然躍り出る。意識という水面下では見えない成熟が無意識界という水面下において進んでいて、幸運に恵まれると、外へとび出してくる」（56）。寝るときも枕元にメモ帳を用意しているという話は理系の研究者にもあると聞く。

4) 私（村主）が学生のころは「専門バカ」という言葉があった。大学の研究者を揶揄した言葉である。様々な研究者に出会ってきた経験から言うと、必ずしもその指摘は当たっていない。むしろ研究者の関心のあり方は瓢箪の形に似ている。入り口が狭くて、奥が深く、かつ広がっているのである。これはアイデアを生むため、必然的にそうなっているとも言える。「ひとつのものを追求していると、心の目は一定の方向に釘づけされ、いつしか惰性によって見るだけということになるかもしれない。見えれど見えず、と同じである。対象とするものごと

よりもむしろ、視野の周辺にあるものの方が新鮮に見える。したがって、おもしろい見方ができることにもなる」（外山、58）。別の比喩を使って言えば、研究者の関心は、池に石を投げ込んだ場合にできる同心円の拡がりのようなものである。あなたの関心には核心がなければならないが、また関心の広がりも必要なのである。発想を生むためにも。

5) あなたは関心のアンテナを張っているか。書店においてある新刊書カタログを見たり、図書館をぶらついたたり、書店の棚を見ながら散歩したりしているか。

6) 加藤秀俊『取材学——探求の技法』（中公新書 1993）が勧めるように、相手の看板に関係なく自分の研究の話雑談風にしてみるとよろしい。思いがけない人が思いがけない形で、示唆を与えてくれる場合があります。「専門の違ったものが、社交的なあるいは同志的な空気の中で語り合うことがどんなに創造的なものであるか、頭のかたい人間の想像を超えるものがある」（外山、82）。

H なかなか執筆に取り掛かれない人に

1) なかなか執筆に取りかかれない人がいる。人間は嫌な仕事に対しては口実を設ける天才である。意識のレベルだけでなく、身体レベルでも、色々と「先にしなければならないこと」が降って湧いてくる。腹が減る、便所に行きたくなる。それらの誘惑には警戒が必要である。私（村主）は尿意を催したときも、本当に我慢ができなくなるまで机にかじりついている。

2) 書ける所から書いていく。書きやすいところから書き始める。

3) 草稿は、自分の中に溜まったものを吐き出す感じで書く。すなわち、形式にまったく囚われない。文献情報なども本文に書き込んでおく。自分がわかればよい。

4) いったん吐き出しおわったら、論文全体の中でどの章やセクションがまだ不足か、まだ弱いか考える。

5) その不足の部分を補強するために、「読んでは考え」の作業を再び繰り返す。

6) 全体の草稿が準備できた時点で、章立て、セクション立て、それらのタイトルについて、内容の観点から再考する。すなわち論文構成の再考である。

7) 論文執筆の初期段階では筆者である自分の立場で書き進めていたが、推敲の段階に入れば、自分を読者の立場におき、読者の立場から構成や文章を見直すことが必要となる。この段階では自分は著者でもあるが読者でもある。

8) これはなかなか至難の業である。人間は自分を突き放すことが苦手だからである。だから、聴いてくれる人（猫でも可）を探して原稿を音読してみる工夫も役立つ。私の知っている人は英文原稿を推敲するのに、原稿の最後から一文一文見てゆく。

9) 鍵語を用いて議論展開をする Wayne C. Booth, Gregory G. Colomb, Joseph M. Williams,

The Craft of Research, 3rd edition (Chicago & London: The Univ. of Chicago Press, 2008)の方法を思い出せ。忘れていたら、その部分を再読せよ。

10) 各段落はしっかり構成されているか。段落には要点文がなければならない。段落を引用から始めているか。前の段落と議論の点でうまく接続しているか。また接続していることを示す言葉は挿入されているか。段落構成（パラグラフ・ライティング）については、木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書 624、昭和 56）が定評がある。

11) 論文の形式も整え始める。文献表記の方式は複数存在するが、自分はどの方式を採用しているのか言えなければならない。また実際に各文献の表記の方式に一貫性がなければならない。この点について、どうしてもよいという指導教員がいるなら、その言葉は無視すればよろしい。

I 論文の目次ページのモデル

第一章 序章

1	はじめに	頁
2	先行研究とその問題点	頁
3	論文の構成	頁

第二章 ○○○○

1	○○○○○○	頁
2	○○○○○○	頁
3	○○○○○○	頁

第三章 ○○○○

1	○○○○○○	頁
2	○○○○○○	頁
3	○○○○○○	頁

第四章 ○○○○

1	○○○○○○	頁
2	○○○○○○	頁
3	○○○○○○	頁

結論	頁
----	---

注	頁
---	---

引用文献表	頁
-------	---

資料	頁
----	---